自らを越えて（十四）

多谷昇太

そのまま見送ればいいものをカナが聞こえよがしに「けっ、嫌なオヤジ！」とやってしまい、それを聞き咎めた男がジロリとこちらを振り返り見るがさきほど同様に「ふん」と鼻を鳴らして行き過ぎるようだ。ところがそれで終らなかった。カナが「ねえ、ねえ、あいつ、こちら村田先輩がさ、年を取って現れたように見えるじゃんよ。な、似てねえ？」とミカに告げるとそのミカが思わず「アハハハ」と笑ってしまったのだ。「しっ！」と大伴さんが制したが時すでに遅かった。男が血相を変えてこちらに戻って来る。

「おい！お前ら。俺がお前らになんかしたか？何か云ったか？俺を笑い飛ばしやがって……しょ、承知しないぞ！」と怒鳴りつけてくる。正直云うと俺もカナの言葉にカチンと来ていたのだが男の余りの剣幕に毒気を抜かれてしまう。ただ唖然として男を見つめるのみだ。大伴さんが男に大仰に手をふってから「いえいえいえ、とんでもありません。あなたを笑い飛ばすなんて…あの、こ、こちらのことで笑ったのです。どうか、その、お間違えにならないで」と云って精一杯の愛想笑いを顔に浮かべて見せる。しかしそんな云い分けなど聞かぬとばかりに「嘘を云え！嫌なオヤジで悪かったな。こっちはちゃんと聞こえているんだ。いいか、おい…」と悪口の云い出しっぺたるカナと笑い飛ばしたミカを見据えて「なんで見ず知らずのお前らに、俺がそんなことを云われなければならないんだ？え？す、少しはれ、礼儀を…常識を弁えろ！」とさらに怒鳴りつける。もう完全に切れている様子だ。しかしそれへ、こちらも額に青筋を立てたカナが立ち上がって、云い返すよりも何よりも、遮二無二（しゃにむに）男に向かって行こうとするのを大伴さんが懸命に止める。「カナ！いいから！おとなしくして！…」さらに「ミカ、村田君、カナを抑えていて」と要請する。ミカは「カナ…」と呼びかけてからカナにすがるが俺は何もしないで…いや、出来ないでいる。俺が抑えようものならカナの怒りは倍加するだろうからだった。カナをミカに託してから大伴さんは男に向き直り深々と首（こうべ）を垂れて、謝って見せた。

「どうも申しわけありません。（カナとミカを指してから）この子たちはまだ分別の効かない娘盛りでして、なんでも笑ってしまうのです。あの…それこそ葉っぱ

が木から落ちても笑ってしまうような塩梅で…へへへ」と照れ笑いをし男の剣幕を抑えようとする。男はこの時始めて大伴さんの美貌に気づいたような表情（かお）をし、同時に自分を上回るような、ちょっと異常とも思えるほどのカナの剣幕にたじたじともしたようだ。またこちらも改めて思い出したかのように男である俺の存在を警戒する表情をもして見せた。それやこれやでさきほどの俺同様毒気を抜かれたがごとくに「…ま、あんたがそう云うんなら、お、俺だって別にいいんだ。その…あ、あの子たちに少しは礼儀を弁えるよう云っといてくれよ」と云い残して立ち去ろうとする。しかしカナが「うるせえ！」と吼え「てめえ…」と啖呵を切るか、あるいは打ちかかろうとさえしてしまう。俺は思わず立ち上がってカナの左腕を抑え「カナさん！止めるんだ！」とこれを制した。大伴さんにこれ以上負担が、迷惑がかかることに堪えられなかったのだ。だが「お前は黙ってろ！」と云いざま空いている方の右手で俺の頬を叩（はた）こうとする。その刹那「止めっ！」大伴さんが高校時代のバレー部で鍛錬したものだろうか絶妙のタイミングと気迫でもってカナを制した。打たれるだろうことを覚悟した俺がむしろそちらに肝を冷やすほどの、それは喝にも似

【上・一発殴ってやろうか？……カナの剣幕Farmgirlmiriam さんの作品 from pixabay、下・村田君「なんでこうなるの？」mofutan.net さんの作品 from pinterest】

た、凄いものだった。それでカナが思いとどまり剰え眼前のこの男さえもがビビってしまったようだ。ゴクリと唾を飲み込みもはや長居は無用とばかり早々にこの場を立ち去ろうとする。「じゃ、俺はこれで…」と、お見逸れした大伴さんに許しを請うがごとくにコクリとひとつうなずいてから怖ず怖ずと離れて行く。そんな男など大伴さんはもはや無視してカナを見据えるばかりだ。まったく、性格判断ゲームを披露してまで俺

たちの親和を図ってくれた大伴さんなのに、そしてそのお陰で俺、カナ、ミカが些かでも本音で語り合えるようになったばかりだったのに…俺は情けなくてうつむくばかりだ。と、しかしこの時男の視線を感じたような気がしてそちらを見ると男が〝この俺に向かって〟陰湿な一瞥を向けていたのだった。その目は『ざまー見ろ。見っともない様（ザマ）こきやがって。へへへ、してやったりだ』と云っているようだった。無性に腹が立ったがしかしいまさらもう遅い。大伴さんの喝を我が身で受けたくなかったし、積み木崩しの災禍を、悲哀を、もうこれ以上大伴さんに味わわせたくはなかったのだ。俺は心中で『黒い霧容易（たやす）からず』を痛感するばかりである。しかし図らずもこれが、この見っともないザマが、さきほど大伴さんが俺たちに問うた「限界を感じる時はない？お決まりのパターンを抜け切れないということはない？」という設問に対する、単なる言葉ではない、我が身の情けなさ、ミゼラブルをもっての答えとしてしまった、なってしまったようだ。元来俺はいざ鎌倉という時に逡巡してしまう、いま一歩が踏み出せないという悪癖がある。すなわちいつもいつもその〝お決まりのパターンを抜け切れない〟のである。ここで云うなら、突然の男の剣幕にあっけにとられ、ただ唖然として男を見つめていたりしないで、この俺が対応すればよかったではないか。男なんだから。大伴さんが詫びるより先に、カナが（殆ど病的な？）攻撃反応を起こす前に、俺が矢面に立てばよかったのだ。それは何も男と一戦交えろということではなく（必要ならすべきだが）例えば「ちょっとあなた、失礼だが何もそこまで怒ることはないでしょう？」とでも物申せばよかったのである。それをせずにカナを諌めた結果カナにブン殴られそうになった。それはたぶん、カナが俺のこの性癖にもはや我慢ならなかった故かも知れない。富士型の大滝登頂の際に奇しくもカナが云った「あたしはさ、あんたみたいに自分の臆病さを隠すって云うか、云い繕うために、分けのわからないことを云うやつ、大っ嫌いなんだよ」の類のことだったのだろう。それはわかるがしかしお互い様を言うつもりはないがカナの攻撃性もかなり異常なのだ。女性はもちろん、一切交友関係を（どころかあらゆる人間関係をも？）持たない俺であっても、このカナを見てまず尋常な女の子とは思えない。なぜこうなったのか知れないが、方やの俺の孤独癖といい勝負である。しかしこうして見るとこのカナやら俺やらの悪癖を、それぞれが矯正するために、こ

の丹沢行は（ひょとして神から？）与えられたものなのかも知れない。だから云えることは、畢竟、誰もが「自らを越えて」行く必要がある、ということなのだろう。ただしかし、その過程に於ては悪魔もまた必ず介入して来るのに違いないのだ。なぜなら（人間それぞれに憑いている）悪魔がそう安々とおのれの餌食を離しはしないだろうと思えるからである（我が心中に巣食う黒い霧を思えばそれが容易にわかる）。さても、であるから、大伴さんの親和への道行きは斯くも困難であることだ…（バカヤロ、他人事のように云うなよ。まったく！）。

さて、俺の心中の述懐に文面を使い過ぎた。話を戻す。男は、呼び止められてはかなわない、あるいは俺たちに追いつかれてはかなわないとばかりに早足で沢を上って行く。その背を見送ったあとでふーっと大きく溜息を吐いてから大伴さんが「まったく、とんだ邪魔が入ってしまったわね。ふふふ、仕方ないわね。ところで御免な、カナ。大声を出したりしてさ」とあやまってみせる。それへ激情をもって返すだろうカナの性癖を慮ってミカが腕をおさえながら「カナ…」と泣きそうな表情で懇願をするようだ。それに「いいよ。わかってるよ」と妹分を気遣うがしかし大伴さんは「しかしカナ、おめえもホント、気が短いな。ええ？いま流行の緋牡丹お竜（注：この小説は１９６８年の設定です）じゃないんだからさ、いい加減にしろよ」と諌めてもみせる。「緋牡丹お竜」の言葉に思わず口元を弛めるカナに「いったいどっちが強いのよ、あんたとお竜さんとさ。ええ？」と微笑みながらさらに聞くと「知らねえよ」とついに一瞬でもカナが吹き出した。それを見取ってから今度は「村田君、気にしちゃダメよ。緋牡丹お竜なんかより姿三四郎の方がずっと強いんだから。ねえ？」とうつむく俺に下から覗き込むようにして言葉をかけてくれる。川崎・蟹ヶ谷のバス停における「それともあれかな、女こわい？」と同じパターンだ。その時同様思わず失笑してしまう俺だったがしかし正直それでだいぶ救われた気がする。カナに〝お前呼ばわり〟されて、脅されて、さらに殴られそうにさえなって、本当に格好（かっこ）悪いことだと、心中で居場所もないくらいに沈んでいたからだ。3人とのこの道行きの途次で何回も味わった『もうもう、嫌だ。俺は嫌われている、嫌がられている。もうすべてを投げ出して1人で行ってしまいたい』のパターンにまたもやはまっていたからである。

「ね。村田君。こんなことで投げ出しちゃダメよ。私

【カナは緋牡丹お竜か？…いやいや違うな。これはむしろ大伴さんだ。カナの間違いのないイメージはまた後ほど…。この写真はpinterestから拝借〜】

たちとのつながりを切っちゃダメ。いい？いまの男の人にずいぶんくやしい思いをしたみたいだけど、それだったらなおさら投げ出したらダメよ。あの男の横槍に負けたことになっちゃう。ね？」「はい、大丈夫です」と小声で答えたが、しかしそれにしてもなぜ俺が男にくやしい思いをしたことまでわかるのか、それが不思議だった。きっと、人が抱く強い気持ちというものは思っている以上に顔に出るのだろうな。しかしもしそうだったらカナに脅されて俺の面目が丸つぶれとなり、超落ち込んだこともわかった筈だ。それについて大伴さんはいったいどう感じたのか？ひょっとしてカナに云った言葉をこう変えて、つまり「しっかし村田君、あんたもホント、気が弱いわね」とでも思って呆れたのだろうか？内心で笑っているのか？…いや、そうは思えない。普通の人間だったらこんなみじめで格好悪い俺にもはや愛想尽かしをし、見限って、距離を置こうとするだろう。しかし大伴さんにはそれが一切ないのだ。だから俺には大伴さんが本当に不思議に思える。前に、F5板立ノ滝を過ぎて始めての休息を取った時に大伴さんが俺を評して「わたしね、あなたに不思議な何かを感じるのよ。たぶんあなたが普段からとっても大事にしている〝何か〟を。それがなんなんだか…わかんないんだけどね」と云ってくれたが、それをそのまま返したい思いだ。こうして行程を共にするにつれてますますその度合いが強くなる…。

さて、その大伴さんが、あの男のお陰で混乱に陥った我々の間の空気を吹っ切るように「正直さ、あの男の人はこの子たち（カナとミカ）に云われても仕方がないところが確かにあった。もおう…完全な根っ暗！」と大仰に非難してみせる。「わははは」ミカが笑い

「ンだ、ンだ」とカナが応じる。さらに「せっかく楽しい性格判断ゲームをしてたのにさ…」と続けたが「楽しくなかった」とカナが余計を云う。それへ「楽しかったんだよ、こいつ」と嗜めてから「まあ、もういいわ。こんなアクシデント。あのさ、ところで、いま実行中のこの沢登りや山登りをもし人生の道行きに例えるなら、〝人生には山あり、谷あり〟なのよ。いい事ばかりが続く分けがない。こうして悪い出来事や悪い人に遭う時もあるんだからね。いいね、わかったか?みんな」と思わぬレクチャーをくれる。それに「アイアイサー」とミカが何も考えずにすばやく答え「へーへー」とウンザリ顔でカナが生返事。俺はと云えば、うつむいた顔を上げてまともに大伴さんを見てから「はい、わかりました」と答えた。それは実際に強い教示を受けた気がしたからだ。『山あり、谷ありか。へー、なるほどな。この人はこうして簡単に割り切ってしまうんだ。しまえるんだ。こうした嫌なことがあったとしても。ドンマイ、ドンマイってやつだな。しっかし強い人だなー』と改めて感心したからだった。およそ俺みたいに〝見っともない仕儀〟に至ったことなどないのだろうなとも思う。俺など（ちょうど今のように）しょっちゅうで、その度にひどい自己嫌悪に陥るのだが、しかしそれでいながら他人に対しては意外と辛辣に、思いもしない嫌悪感を抱くことが時々あるのだ。その何と云うか…何かの拍子でその人が突然ダサく見えると云うか、どうかすると俗に云う〝鼻につく〟ことさえもが間々あった。その故はしかし…まったくわからない。こんな、さっきの大伴さんの言葉ではないが「完全な根暗男」の身でありながらよくもそんな感覚が持てたもんだと人は云うだろうし、自分でもそう思う。しかしこの性癖も偽らざる自分の内面の姿なのだから致し方ない。ま、それはさて置き、こんな取り止めのないことを思っていたのは言葉にすれば斯くも長くなってしまった分けだが、実際のいまのこの場に於てはほんの一瞬の思考であり、感覚だった。ところがその俺の感覚を読んだがごとくに「ふふふ」と陰湿な含み笑いをする者があった。黒い霧！と咄嗟に思ったが違うようだ。そいつは「けっ、いい気なもんだよ大伴さんのやつ（それから俺を目で指して）こいつと云い…今に見てなよ」と言葉を続け、且つ嘯（うそぶ）いたのだ。カナだった。性格判断ゲームの結果はまたあとで、いまはもう再出発！と号令をかけて身支度を始めた大伴さんの目(耳?）を盗んでミカにそう囁いたのだ。そのミカは「うん、うん」とほくそ

笑みながら承っている。まったく！本当に悪い女の子だ、カナのやつは…と呆れたし、またミカにしてもなんで、あたかも同意するかのように相槌を打ったのかが解せない。俺への悪意はともかく、なぜ（ミカの表現で云う）親分・大伴さんへの仕返し云々に反発しないのかが不思議であった。まったくわからないものだ、人間というものは。尽々そう思うしかない。善と云うか強さと云うか、光指向の面で大伴さんの得体が知れないし、無明の闇指向においてもカナやミカにはどこまでもチンプンカンプンである。これは全体、全き孤独男の俺であったればこそ、のことだろうか？他の人たちにおいてはこう云った人間の性癖の違いやそれぞれが抱く指向の違いなど当たり前、自明のことなのだろうか？わからない。ホントわからない…。

さて、時刻は１３時ちょっと前になっている。ここ三俣から渓枯れまでは３０分ほどで着くだろう。そこから表尾根登山道を経て目的の三の塔まではさらに１時間ほどの行程と見る。１４時半着だ。まったく俺のドジやら何やらでとんでもない鈍行となってしまった。三の塔での休憩時間にもよるが麓の戸川への下山到着時間は１７時頃となるに違いない。やべえやべえである。男の俺１人なら帰りが夜になろうがいっさいお構いなしなのだ。かつて丹沢での初日の出を拝もうとして表尾根を夜中に登って行ったことだってあるくらいだから。しかし今は女性３人との道行中だ。もろ責任を感じてしまう。再び大伴さんから先頭をおおせつかった俺は２メートルの滝やＦ１２・三段の滝の４、６、４メートルの最後の滝群を大伴さんから咎められない程度の急ぎ足で制覇、先導して行く。下段４メートルの滝こそ左から巻いて行ったが中段、上段は直登した。最後のスラブ状の滝を左隅から上って行く時、以前初夏に来た時にここで野イチゴを獲って食べたことを思い出す。野イチゴは（往時は）丹沢の尾根道にも沢にもよく実っていて、登山の疲れを癒す素敵な甘実だった。ああ、いまが初夏なら３人に教えて食べさせてあげられたのになと思うと残念である。きっとミカが喜びそうだ。さて、いよいよ最後の最後、よく人がすべって滑落する一枚岩に来た。いかにも一気に上ってくださいとでも誘っているような、滑り台にも似た中央部を避けて左側の窪みを上って行く。その際にその旨を後続の３人に伝えたのだが「なに、こんな岩」と嘯くカナの声が気になった。３人上り終わっても俺は気になって岩の淵に立って最後のカナを待っている。カナは「そこをどけよ」と云いざま滑り台を一気に駆け

【かわいい野イチゴ from pinterest】

上がって来た。まったく、ホールドも何もないところを危ないなと思った刹那右足を滑らせたカナが滑落しそうになった。「危ない！」と云いざま俺は姿勢を低くしてカナの右手首をつかみ力まかせに一気に身体を引き上げた。最後の岩を上り終わったと云ってはミカと喜び合っていた大伴さんがすっ飛んでくる。まさかカナが云うことを聞かずに滑り台を駆け上って来るとは思わなかったのだ。まだ俺の右手を両手でつかんだままで自失気味のカナに「カナ！このバカヤロ！なんで村田君の云うことを聞かないの！」と叱り飛ばす。しかしそう云いながらもカナの身体を確保するように支えながら「あー、でもよかったあ…村田君ありがとね。もしカナが落ちてたらあたし…」とカナの無事に安堵することしきりである。いまさらのように寄って来たミカともども俺たちを岩の淵から奥へ誘おうとするが、ようやく自分を取り戻した風のカナが平然を装って「へん、何よ、大伴さん、大騒ぎしないでよ。ちょっと足を滑らせたぐらいでさ」と云うのに「何を云ってるの！ここから下を見てごらん！」と、再び剣幕を起こしてはカナに下を指差す。下から見ればさほどでもない大岩だが上から見ると結構な高さである。もしここを転げ落ちていたら無事では済まなかったろう。それに気づいた風のカナだったがそれを認めずに「ふん、だいじょうぶだよ、こんなとこ。転げ落ちたって別にどうってことないよ」と嘯く。それへ「あー、もういい！とにかくもう、みんなこっちへおいで！」と

【一枚岩の写真。ネット上の渓人「流」さんから拝借】

云っては大伴さんが俺たちを奥へと誘った。その場でとにかく村田君に礼を云うようにとか散々カナに説教を垂れる。さきほどミカに「いまに見てなよ」と云った手前かそれとも絶対的なツッパリ根性ゆえか、俺への礼も含めてカナは如何（いっか）な聞く耳を持ちそうにない。むしろ俺の方が居たたまれなくなってリュックをその場に置いたあとで何気なさを装いながら上流の方へとぷらぷらと歩きまわる。「もういいですよ、大伴さん」などと云って止めに入りたいのだがそんなことの出来る俺ではない。今はそれよりも気になることが一つあった。この先標高９８０メートル地点の（三ノ塔）尾根出会いにおける分岐点だった。常道は先行者が間違えないようにと、使った草鞋を木の枝に掛けておいてある左のルートを行くのだが、実を云うと俺はその道を行ったことがないのである。そちらへは行かずに真ん中のガレ場になった枯れ沢をそのまま行くのだ。つまり二ノ塔から三ノ塔に通じる表尾根に出る分けだが但し、このルートは表尾根直下付近ではほとんど道が無くなってしまう。辺り一面クマザサに覆われて右も左も分からなくなる。だからあとは遮二無二上に向かってその笹などをホールド代わりに掴みながら上って行くしかない。そうこうするうちに上から人の声が伝わって来（表尾根道は登山者の数が多いから）、いきなり表尾根道に出るのである。偶々そこで出くわした登山者らにしてみればとんでもない所から人が出て来たという塩梅になる分けだ。だから、さてどうしようかと悩んでいるうちに数十メートル先にしゃがみ込んでいる男の姿が目に入った。目を凝らすと…なんとあの男だ。カーッちきしょう、まだ居やがったのかと憂鬱になったが仕方がない。無視して通り

過ぎればいいんだとか思ってとにかく大伴さんにご注進に及ぼうとする。しかしここでふとコントラストなイメージが脳裡に浮かんだ。先でしゃがんでいる男の姿からはいかにも暗く、辛く、どうかすれば悲しくもあるような暗褐色な印象が伝わって来、戻ろうとする大伴さんら3人を思えば躍動した生命のオーラがイメージされたのだ。このアンビバレンスは…つまり…俺だ、と思ってしまう。俺はきっと、いまそのアンビバレンスな境目に居るのに違いない。例の悪夢を思い出す。俺が丹沢登山を思い立つきっかけとなったあの悪夢だ。夢の中、あの沈まんとする夕日があった。表の校門辺りから「村田くーん（いっしょに帰りましょうよ）」という女生徒らの声が聞こえて来た。「村田くーん」…え？「村田くーん」って…ああ、大伴さんが呼んでいるのだ。忘失から覚めた俺は複雑な表情をして3人のもとへと帰る。

「村田君、どうしたの？ひとりで離れちゃって。ふふふ。もう終わったわよ、カナへの説教。（カナに）ほら、カナ」渋々と立ち上がったカナが「さっき、どうもありがとな」と云ってペコリとひとつ頭を下げる。俺は「ああ、そんな、礼なんて…」と明るい笑顔で答えた。なにせ〝女生徒ら〟の元に合流できたのが嬉しかったからだ。「ありがとうございましただろうが」また咎めようとする大伴さんを慌てて遮って「あの、大伴さん。この先にさっきのあの、あの男がまた居ますよ。なんかあの…動かずにしゃがみ込んでいます」「えーっ？」とミカ「ちぇっ、また出たのかよ？」カナが舌打ちする。大伴さんは「ああ、そう。別にいいじゃない？居たって。あ、ただカナ。おまえまた突っかかるなよ」とカナに注意してから「あー、とにかくもう遅れっ放し。（腕時計を見てから）ほら、もう1時４０分だわ。さ、もう行こ行こ」と再出発を促した。リュックを背負ってさきほどの順番で歩き出す。俺、ミカ、大伴さん、カナの順だ。いくばくもなく男のもとへと辿り着く。男は腰を地面におろして両膝を立て、右足のくるぶし辺りを手でさすっている。その足は靴を履いておらず裸足だ。俺たちに気づくと思いっ切り嫌な表情をしてから顔を背けた。どうも俺同様に右足をどこかで痛めたようだ。足元にはテーピング用のテープが転がっていたがまだ足に巻かれていない。さすっていたのが左手だったからどうやら右手も痛めているようである。俺は立ち止まり、どうしようか、声を掛けようかと逡巡する。

（…続く）